



特定非営利活動法人
輪島土蔵文化研究会
萩野アトリエ 主宰
工学博士
萩 野 紀一郎

輪島の土蔵修復活動

能登半島地震

3月25日、半自力建設中の自宅で作業中、ゴーッと唸る音が山から聞こえてきたかと思ったら、建物がギシギシ・ガタガタと鳴り、コンクリートスラブも波を打つように感じた。私は何が起こったのかわからず声にならない叫びを上げ、おろおろと立っていただけであった。揺れがおさまってはじめて、これが地震だと理解した。

数日間、アトリエや仮住まいの片付けに追われた後、建築設計に携わるものとして何かできないかと考え、まちづくりコーディネーターの水野雅男氏らとともに建築相談活動を開始した。当初は、さまざまな情報が錯綜し、自分達も含めて精神的に動揺していた。特に、応急危険度判定で赤紙や黄色紙が貼られ、ダメージを受けた建物を見て、壊さなければならないと考える人が多かった。われわれは、「伝統的な木造建築は地震に弱かったわけではなく、赤紙や黄色紙を貼られたからといって、必ずしも壊さなくてはいけなくて、修復の可能性もある。まずは危険な状態を回避し、その上で解体するか修理するか落ち着いて考える方がいいのではないか」と考えていた。この活動は、石川建築士会輪島支部



や輪島の建築組合も合同で行い、少なからず住民の方々へ精神的な落ち着きを与えることはできたと思っている。

この建築相談活動を通じて痛感させられたことは、土蔵の被害が多いことであった。

輪島の土蔵

北前船の発達、下地に適した地の粉が採れたことを背景に、江戸時代から輪島では漆塗りが発達した。その製作と販売を行う塗師の家は人前職後といわれ、表に住宅、奥に仕事場が配され、その最も奥にある塗師蔵で、上塗り作業が行われていた。土蔵の上階は、年間を通じ湿度温度が安定し、埃やちりを制御し易く、上塗りに極めて適した空間であった。



その後、輪島塗は時代の荒波にもまれ、バブル期には、設備機器を用いた新しい建物で上塗りを行うように移行した塗師屋も多く、バブル以降は、何軒もの塗師屋が廃業に追い込まれた。数百棟以上あった塗師蔵も、多くは解体されたり、倉庫に転用され日常から置き去られ、地震直前まで上塗りが行われていた塗師蔵は数十棟に満たないと思われる。

皮肉にも、今回の地震で多くの被害を受けたことで、表通りからは存在すら知りえなかった多くの土蔵の存在が浮き彫りにされた。私を含めて、多くの輪島の人たちも、これほど多くの土蔵が輪島に存在していたことすら知らなかった。

土蔵再生によるまちづくり

土蔵の被害が多かったことを受け、4月半ばに、日本を代表する左官職人・久住章氏をはじめ、左官

職人や研究者に来ていただき、約20棟ほどの土蔵を調査した。その結果、輪島の土蔵が大きな被害を受けた理由として、土に粘性が少なかったこと、小舞や縄掛けの方法が甘かったこと、水害にあったこと、土壁の乾燥が不十分であったこと、などが明らかにされた。久住氏によると、「阪神大震災ではこれほど被害を受けていない。すべての土蔵が地震に弱いわけでない」とのこと。しかし残念なことに、輪島の土蔵には地震に弱い条件が揃っていたと考えられる。一方、土壁が崩落したものの、土台や柱の下部を除けば、木構造自体はしっかり残っていた土蔵も多かった。すなわち、技術的には多くの土蔵が修復可能であることも確認された。

この調査から、「土蔵を再生することが、単に地震からの復興でなく、塗師文化が育てた輪島の街の新たな魅力づくりになるのではないか」という方向性が見えてきた。

さらに、土蔵の再生は、左官技術の伝承にもつながる。今日、竹の小舞を掻き、本物の土を扱える左官職人は極めて少ない。それどころか左官職人の数そのものも減少している。土蔵修復を通じて、全国の左官職人に実際に土蔵の小舞や土塗りの作業に携わる機会を与え、左官講習会や左官技術の記録を作成することが可能となる。

早速、仲間と土蔵修復実行委員会を組織し、本格的な土蔵修復の準備を開始した。

土蔵の調査と解体撤去との闘い

5月の連休中には、相談を受けた約40軒80棟の



土蔵のヒアリングや実測調査を行い、土蔵が修復可能であることを所有者に説明した。また、土蔵のタイプ分けを行い、以前、金沢大野で行われた方法を参考に、母屋を通らずにアクセスでき、所有者が必要ないと考えている土蔵について、十年間無償で借り受け、その代わりわれわれのグループで復元・活用する提案もした。その結果、現時点で3軒4棟の土蔵を借り受けることになっている。

土蔵の修復活動を展開する上で、最も大きな問題



は、解体撤去との闘いであった。これまで震災復興における公的補助は住居に限定されていたが、今回は土蔵にも摘要されることになった。つまり、半壊以上の土蔵はタダで解体撤去してもらうことができる。一方、修理への補助は、個人資産への補助とみなされ、極めて限定される。われわれは、土蔵が修復可能であること、グループとして取り組めば公的補助を活用できる可能性があること、また左官技術を共有できることなどを訴え、土蔵の所有者に解体を決断する前に冷静に検討することを勧めた。しかし、相談の余地なく解体してしまった例も多く、相談されて調査を行った土蔵ですら、所有者の考えが変わり解体されてしまったものもある。実際、7月までに輪島市全体で約500棟の土蔵の除去申請が行われ、その多くが既に解体されてしまった。

三つの修復方法

そのような状況下、一刻も早く修復事例を示すことが大切と考え、左官職人の協力を得て、具体的な検討にはいった。われわれが借り受ける土蔵はじっくり計画を練ることにし、まずは持ち主が早急に修



復を希望されている土蔵において、この夏から修復支援活動を開始することを決めた。そこでは、所有者の要望や使い方、立地、被害状況などを考慮して、以下の三つの蔵で、三つの異なる方法が採用されることとなった。

第一に、大崎邸の塗師蔵では、伝統的な土蔵の方法で、真竹の小舞に厚い土壁とした。ただし、これまで輪島の土蔵になかった間渡し竹を入れ、竹釘で横竹を支え、構造的に強くする工夫を施した。工期が比較的長くかかるが、ここでは5月の連休中に、合板と和紙で仮設の上塗り場を土蔵内に入れ子状に作っていたので、仕事しながら修復工事が可能であった。

第二に、大工邸の塗師蔵では、土蔵が住宅などに完全に囲まれているので厚い壁は必要ないと判断され、工期を短縮して早急に上塗りを再開できるように土壁を薄くし、割竹で小舞をかき、真壁で仕上げる方法とした。

第三に、古窪邸では、水害の影響で足元約1mほどが大きな被害を受けたが、上部は比較的良好な状態で残っているので、足元だけを日干しレンガ積みで



補修する方法とした。

修復の準備

6月には、左官職人の久住章氏、小林隆男氏、竹本茂之氏、人見正美氏らが修復の技術監修や指導を行ってくれることとなり、修復へ向けた準備や検討が進められた。

6月半ばには、1スパンだけ原寸で木組みをつくり、小舞、竹クギ、泥ダンゴ、手打ち、日干しレンガづくりの練習を行った。7月半ばには、現場で小舞を試作、原寸図を描き、詳細を詰めていった。

土については、落とした壁土は砂が多く粘性に欠けるため、少し混ぜる程度にし、新たに良質の土を用いる方がよいと判断された。できるだけ地元の土



を使おうと探した結果、三井町洲衛から土を採集することにした。

ワラスサについては、解体される家から古畳を集め解体し、多くのボランティアの力で約1トンあまりを確保した。

竹も、崩れた壁から取り出した竹は殆ど使えないものであった。晩秋に伐採した竹は、養分の吸い上げが少なく小舞に適している。幸い左官職人が、国産の縄とともに、自分の在庫や仕入先から手配してくれた。

7月末には、型枠で土場をつくり、約20トンの土を運び込み、ワラスサを入れ、土づくりを開始した。

1年ほどねかせることも多いそうだが、夏の暑い時期なので、ひと月ほどでも十分発酵が進むと判断した。実際すぐに独特の臭さが加わり、水やワラスサを加えながら、素足で土練りを何度か行った。

土蔵修復ワークショップ

いよいよ八月半ばから、三つの土蔵の修理が開始された。多い日には、左官職人20人以上、学生や市民のボランティアが30人以上で汗を流した。

大崎邸では、約二週間で小舞をかき、八月末の二日間、30人以上で手打ちを行った。泥ダンゴを手渡しで送り、小舞に打ちつけ、土を竹の間にくい込ま



せる。泥が飛び交い、落ちたり、はねたり、お祭り騒ぎの中で、竹かごのような小舞から土蔵へと変わっていった。通気の確保のため、一部の手打ちは先送りにした。引き続き九月には、カブキと呼ばれる扉や窓飾の下地や、隣の倉庫と接している部分の小舞と荒壁を塗った。十月には、残りの手打ちも完了した。今後、乾燥期間をとり、春以降、裏返し、大直し、樽巻きを行う予定である。

大工邸では、割り竹の小舞を約一週間で仕上げ、練った土をバケツリレーで送り、鏝で荒壁をつけた。9月には、チリ周りの処理や裏返しが行われた。年内に中塗りが終わり、春には漆の上塗が再開される予定である。

古窪邸では、近所の小学校のテラスを借り、土を



運んでは足や手で練り、木型に入れて抜く作業を繰り返し、約1週間で4種類の形状の日干しレンガ約2,000個を作りあげた。乾燥に2~4週間かかったが、その間は現場で崩れた土壁の撤去、日干しレンガの試し積みが行われた。9月半ばから本格的に日干しレンガを積み上げ、10月半ばにひととおり積み終わった。

かつて土蔵の手打ちは、茅葺きと同様、結(ゆい)といわれる近隣や親戚などの仲間でお互いに協力しあって行われた。そのような意識が希薄な今日、左官職人から子供まで、全国から集まった人と地元の人、皆で力を合わせる貴重な機会となった。



今後も続く土蔵修復

修復を開始した三つの土蔵では、今後も作業は続行する。さらに来年以降に修復を検討している土蔵もいくつかある。また、借り受ける土蔵についても、崩れた壁土の撤去はほぼ完了し、設計ワークショップも行ったが、実施に向けて再度計画をつめる必要がある。10月には、輪島土蔵文化研究会「土蔵の輪」としてNPO法人の認可も下り、今後も長いスパンで活動を続けていく。

以上、この半年以上にわたる格闘の一部を紹介させていただいた。無力感に駆られることの連続であったが、唯一の救いは、実際に修復や保存再生が少しずつかたちに現れてきたことである。地震直後の惨状を思い起こすと感無量である。また、これらの活動を通じて何人の方々と出会ったであろうか。多くの方々のご指導、ご助言、ご協力に感謝する。